卒業論文

佐伯胖の学び観とコンピュータ教育

総合教育科学科

基礎教育学専修　基礎教育学コース

伊藤歩桂

佐伯胖の学び観とコンピュータ教育

序章 …１頁

　第１節　問題関心 …１頁

　第２節　先行研究 …１頁

第３節　佐伯胖の来歴 …２頁

第４節　章構成 …３頁

第１章　CAIシステムの肯定（73-76） …４頁

　第1節 …４頁

　第２節

　第３節

第２章　認知科学を基盤とした学び観とCAI批判（77-82）

　第１節

　第２節

第３章　文化的実践への参加としての学びとコンピュータ教育（83-92）

　第１節

第２節

第３節

終章

序章

第１節　問題関心

　現在⼩・中・⾼等学校において、ICT教育が急速に進んでいる。教育⼯学という⾔葉は1960年代から使われるようになり、その後情報技術の開発とともに現在に⾄るまでその勢いを増してきたが、教育⼯学の歴史について研究したものは少ない。そこで本論文では、もともと⼯学部出⾝で教育⼯学を推進していたが、学びとはどうあるべきか、わかるとは何かということを研究したことを経て、教育⼯学の進展を反省的に捉え、コンピュータ教育の負の側⾯を指摘するに⾄った佐伯胖の思想に着⽬する。佐伯の学びそのものやコンピュータ教育に対する意⾒の変遷を考察し、佐伯が批判やコンピュータ教育の負の側⾯を指摘するに⾄った原因は何か明らかにするとともに、現在のICT教育にも何か提⾔を与えられないか検討したい。

第２節　先行研究

　本節では、教育工学の歴史が先行研究においてどのように捉えられているのかについて確認する。

　山西・赤堀・大久保は1970年代は学習形態は一斉授業であり、効率化をキーワードに、映像などを用いて学習が行われた時代であるとしている。1980年代になると、一斉授業ではなく個別学習が重要なのではないかと考えられ、コンピュータを用いて一人一人に合った学習が目指された。1990年代になるとインターネットの出現も影響し、協同学習が注目されるようになった。

　以上のように技術の発展やその当時の教育観に照らし合わせて教育工学の歴史を研究したものはあるが、あくまでも単線的な発展史に留まっており、学びとはどうあるべきかという考察とともに反省的にその歴史を捉えたものはない。そこで、CAIを肯定していたがその批判に転じた佐伯胖の思想の変遷を追うことで、教育工学の歴史を捉え直したい。

第３節　佐伯胖の来歴

佐伯胖は1939年岐阜県に生まれ、1959年に慶應義塾大学工学部管理工学科に進学する。管理工学を専門としながらも、人間と機械との関係を模索する中で、慶應義塾大学で教育学を研究していた村井実教授との出会いがあり、そこでティーチング・マシンなどの研究を行うこととなった。修士課程修了後、佐伯は1968年にワシントン大学大学院に進学した。そこで初めて心理学の授業を受けたことにより、認知心理学の道を進むことになる。

1971年に東京理科大学工学部経営工学科助教授として帰国し、アメリカ留学時代から取り組んでいた意思決定研究を進め、CAIを用いた教授理論を論文としてまとめている。またこの時期、佐伯は同僚の溝口文雄らとともに認知科学会の設立に向け精力的に活動を行い、1983年に日本認知科学会が設立された。1981年には東京大学教育学部に助教授として着任し、この時期に関して後に佐伯は、ひたすら日本での認知科学研究の振興の旗振り人として過ごしたと述べている。

1980年代の後半からは教育と認知科学の問題に深く関わるようになり、教育とコンピュータの間の新しい関係性についても指摘している。さらに認知科学における「状況論」の展開とともに、学びにおける二人称的世界（YOU）の重要性を強調する「ドーナッツ理論」や文化的実践への参加としての学びなど、佐伯独自の理論を提唱した。2000年には東京大学を定年退官し、青山学院大学文学部教育学科で、幼児教育学を専門に研究活動を続けることになる。2008年からは青山学院大学社会情報学部に移籍し、ヒューマンイノベーションコースを立ち上げ、2012年には公益社団法人信濃教育会教育研究所所長も務めている。2015年からは田園調布学園大学大学院人間学研究科子ども人間学専攻教授の任に就き、2021年に退職し現在に至っている。

第４節　章構成

本論文では、以上のような先行研究と佐伯胖の来歴を受け、佐伯胖が学ぶとはどういうことだと捉えていたのか、また教育においてコンピュータがどのような役割を担うべきだと考えていたのかに関する変遷を明らかにするべく、以下のように各章を構成する。

　第⼀章では、1973 年から1976 年までのCAI システムに賛成している時代について検討する。この時代では佐伯⾃らコンピュータを⽤いて個別指導を実現するCAI システムの開発にも取り組み、コンピュータを教育に積極的に使⽤する姿勢を取っている。「わかる」とはということに関しては、「おぼえる」と対⽐しつつ議論している。

第⼆章では、1977 年から1982 年までの認知科学を基盤とし「わかる」とはということを考察したうえで、CAI 批判に転じた時代について検討する。

第三章では1983 年から1992 年までの「わかる」とは⽂化的実践への参加であるということを提起し、教育におけるコンピュータ使⽤の負の⾯を指摘しつつも、そのあり⽅を模索した時代について検討する。